

今週のお薦めレコード

このレコードを聴きタイ



第8029番 税込み8800円



シューベルト ピアノ五重奏曲『鱒』
ヘブラー(p)、グリュミオー・トリオ、カゾーラン(cb)
蘭フィリップス/802757LY/ハード・ジャケ
1966年録音/ステレオ/G

これは、当時のフィリップスの二大看板スターの共演と言うこともあるって話題を呼んだ。針を落としてすぐに気づくのはピアノとヴァイオリンの音色の違いである。ヘブラーのピアノはどこまでも明るく健康的で、グリュミナーのそれは僅かな陰りがありながらやさしい上品さで包み込む。こうした個性のぶつかり合いではなく、個性の融合を楽しめるレコードだ。あるいは、この作品自体にも憂いと歓喜と言う2面性があるのかも知れない。川面を自由に泳ぐ鱒の姿も見る者の心の持ちようで毎日違った趣で目に映るだろう。音楽の深さを気付かされる。(山田)

第8030番 税込み13200円



ヴェルディ レクエイム シュワルツコップ(S)、
ルートヴィヒ(Ms)、ゲッダ(T)、ギャウロフ(B)
フィルハーモニア管&合唱団/ジュリーニ
英EMI/SAN133/2枚組/1963年/ステレオ/G

私の記憶ではシュワルツコップがジュリーニの才能を見込んでいてEMIディレクターである夫ウォルター・レッゲに紹介したらしい。40代後半のジュリーニがEMI録音によって頭角を現したのは事実であり、これはその頂点であり、セラфин盤と並ぶ。ソリストにはイタリア人がおらず、オーケストラと合唱団はイギリス。ところが、紛れもないヴェルディの神髄が鳴り響くのはひとえにジュリーニの力である。トスカニーニにも学び、サバータの後任としてスカラ座の首席指揮者となった彼のキャリアに不足なく、この名演奏を生む素地は整っていた。(山田)

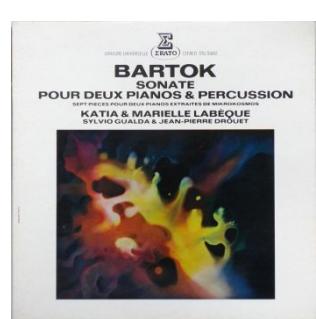
第8031番 税込み3300円



ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第12、13番
グレン・グールド(p)
米コロムビア/M37831/1979-81年/G

デジタル録音が彼に興味を持たせ、再び燃え上がらせたのだろうか。CBSから相次いで発売になったグールドの新譜はいつも話題を浴びた。私はステレオ時代の演奏よりもこの頃の録音が好きで、新譜を聴き漁ったものだ。葬送行進曲を第3楽章に持つ第12番はその部分に固執しなければ大袈裟に構えた部分が少なく親しみやすい曲だ。グールドの歯切れよく明快なタッチは作品への興味を新たに引き出してくれる。人気曲「月光」の前にこの作品第13番は震んでいるが、形式を持たないことによる自由さはグールドの好みを反映して上昇気流に乗る。至る所でグールドの声が聴かれる。(山田)

第8032番 税込み3300円



バルトーク 2台ピアノと打楽器のソナタ
ミクロコスモスより7曲
ラベック姉妹(p)、グアルダ、ドゥルーエ(perc)
仏エラート/STU70642/1970年録音/G
ラベック姉妹のデビュー盤。

若いサウンドが炸裂するレコード。まだ十代のラベック姉妹のデビュー盤であり、パリ・オペラ座の打楽器奏者だったグアルダの音も目が覚めるような激しい演奏。正に「恐るべき若者たち」の登場だった。この曲はオーケストラ版もあるが、風通しの良い小アンサンブルの方がずっと聴き応えがある。これはオーディオファイルとしても一級品であり、きっと部屋を揺るがす様なサウンに興奮させられることだろう。B面に収められた7曲の「ミクロコスモス」の張りのある音色も聴き物だ。(山田)